

## ルーマニア語の母音縮約

林 博 司

ルーマニア語は東方ラテン語の中で生き残った唯一の有力な言語という性格の故に多くの言語学者達の関心を引き、多くの研究成果が発表されているのは周知のことである。しかし、その多くは歴史的・文献学的興味から成されたもので共時的観点に立ったものは比較的少ないようである。そこで本稿では、共時的観点に立って現代ルーマニア語（主としてDaco-Roumanian）の母音縮約という現象を観察することにする。(1)

- (1) a. într-o dimineata  
 b. cine credeți că-i aștepte în hol.  
 c. dar pînă acum n-am făcut decît lucruri utile

(1)の a, b, c は各々 întru + o, că + îl, nu + am という母音連続のうちどちらかが脱落したものである。また

- (2) a. enormele săli ale……pe care le-ați văzut  
 b. vă uitați la șpan, nu-i așa?  
 c. ce-i acesta?

(2)の a, b, c は各々 le + ați, nu + i, ce + i という母音連続のうちいずれかが半母音化して二重母音になったもので、(1)の場合も(2)の場合も正書法では - (ハイフン) で表わされるのが特徴である。(2) 本稿ではこれらの現象を生成文法的な考え方の上に乗って、統語論的側面と音韻論的側面から見ていくことにする。生成文法のわく組は、特に意味部門と統語部門については多くの論議があるものの、統語部門と音韻部門との関係については比較的意見の一致をみているようである。即ち、基底部門で生成された深層構造は多くの変形規則の適用を受けた後表層構造になり、この表層構造が音韻部門への入力となる訳である。また、統語部門と音韻部門の間には再調整規則と呼ばれるものがあり、余剰規則、区別素性付与規則・境界素性削除、付与規則などがこれに含まれる。(第1図)

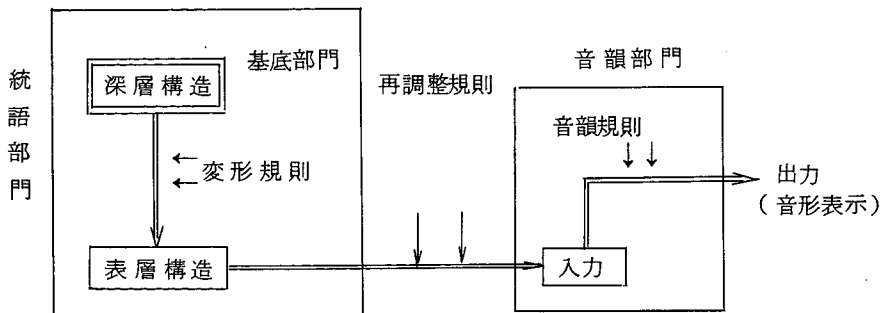


図 1

本稿で扱うのは表層構造が最終的出力である音形表示に至るまでの課程である。何故こういう考え方が必要であるかという、

- (3) a. așa i-a fost scris  
b. de multe ori  
c. pentru opera noastră

(3)の例において *așa + i*, *multe + ori*, *pentru + opera* という母音連続があるのに縮約が全然おこっていない。即ち、同じ母音連続でも縮約のおこるものとおこらないものがある、という訳で、これは明らかに音韻論的情報だけでは説明不可能である。やはり統語部門からの情報が必要である。これがその理由である。この生成文法のモデルが最も役に立ちそうであることは容易に想像できよう。

#### 1. 縮約のシンタックス

先に見たように、全ての母音連続が縮約をおこすわけではない。縮約をおこす組合わせは以下に見るように、かなり制限されている。

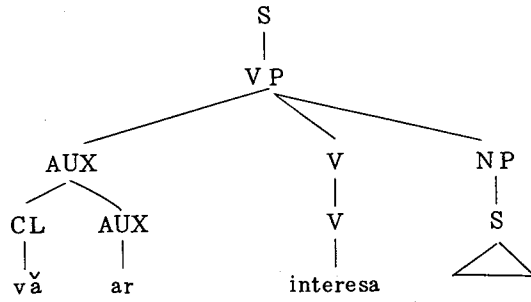
- (4) a. cred că v-ar interesa să vedeți biblioteca  
b. dintr-o țară de la nord  
c. mei colegi de ignorantă care-și exprimă .....  
d. de ce-mi tulburi apa ?  
e. cine credeți că-l aștepta <sup>^</sup> în hol ?  
f. dar până acum n-am făcut decît .....  
g. a-și urma drumul  
h. avea ..... și-un cufăr

(4)の例からわかるように、縮約がおこるものは前置詞(b)、人称代名詞(a, c, d, e, g) 副詞の nu (f) であり、縮約をおこさせるものは(即ち、その環境となるものは)、完了ないしは条件法の助動詞(a, f)、不定法の a (g)、関係代名詞又は疑問詞(c, d)、接続詞(e)である。(3) 以下、主として縮約のおこる側を中心にして、もっと詳しい分析を行いたいと思う。

##### 1-1 人称代名詞

人称代名詞との組み合わせは助動詞と接続詞の二つがあるが、後者はあとにしてここでは助動詞との組み合わせのみを考える。例(4)a (5)として再掲)の P-marker は第 2 図のようになろう。

- (5) cred că v-ar interesa să vedeți biblioteca



第 2 図

(ここでCLとあるのは clitics のことである。)これは統語的変形規則の適用を全て受けて、再調整規則への入力となる段階の表示であって、ラベル付表示で表わすと(6)のようになる。

(6)  $\{ \# \{ \# \{ \# [ \check{v} \check{a} ] [ ar ] \# \} \{ \# [ \# \text{interesa} \# ] \# \} \{ \# \dots \dots \}$   
           S   VP   AUX   CL   a   AUX   AUX   AUX   V   V           V   V   NP

Chomsky-Halle (1968) のモデルによれば、# 挿入は再調整規則で行われるが、そこではもう一つの # に関する調整が行われる。それは Selkirk (1972) によれば(7)のように定式化できる<sup>(4)</sup>

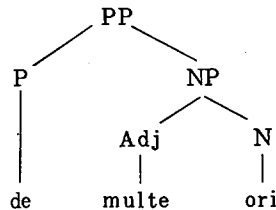
(7)  $W \# \}_x \# \}_y Z$  又は  $W \{ \# \{ \# Z$  ( $Y \cong S$ )

という sequence で内側の # を消去せよ

(7)によれば(6)は(8)のようになる。

(8)  $\{ \# \{ \# \{ [ \check{v} \check{a} ] [ ar ] \# \} \{ \# [ \text{interesa} ] \# \} \{ \# \dots \dots \}$   
           S   VP   AUX   CL   CL   AUX           AUX   V   V           V   V   NP

(8)が音韻部門への入力となるのであるが<sup>(5)</sup>、縮約をおこさないものとの点がちがうだろうか。例えば de multe ori を考えてみると P-marker とラベル付表示は各々第 3 図, (9)のようになる。



第 3 図

(9)  $\{ \# \{ \# \{ \# [ de ] \# \} \{ \# \{ \# [ multe ] \# \} \{ \# \{ \# [ ori ] \# \} \# \} \# \}$   
           PP   P   NP   A   NP   N   NP   PP

(9)が(7)の適用を受けると(10)になる。

(10) [ # [ de ] [ # [ multe # ] [ # ori ] ] # ]  
 PP P P NP A A N N NP PP

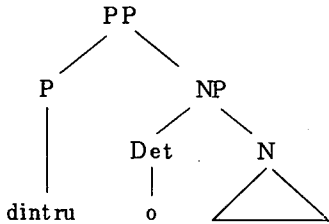
(8)と(10)を比べてわかることは、(8)の母音連続〔v ar〕には#が一つもないのに対して、(10)の〔multeor〕には#が二つも介在しているということである。即ち、統語上密接な関係にある人称代名詞と助動詞との間には#はなく、それほど密接な関係にない形容詞と名詞の間には#が二つもあるということ、統語論的關係が明示的に（explicitly）示めされていると言える。以上のことから次のことが言えよう。

(1) 縮約は問題になっている二つの母音間に#が介在しない時に起こる。

1-2 前置詞

前置詞との組み合わせは冠詞のo, un (una) のみである。例(4)bをP-markerと共に示せば次のようになる。

(12) dintr-o țara de la nord



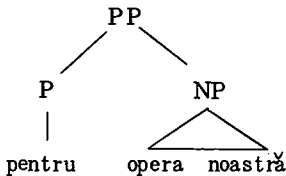
第 4 図

これらのラベル付表示（最終の形）は(13)のようになろう。

(13) [ # [ dintru ] [ # [ o ] [ # țara …… ] ] ]  
 PP P P NP D D N

(13)はdintruとoの間には#が一つ介在しており、(11)の原則に合わず、従って、縮約はおこらない筈である。この問題を解決するためには次の二通りの方法があろう。一つは(11)の原則を緩める方法、もう一つはこの#をルールによって取り去る方法、である。ところで(3)cで挙げた例を考えてみよう。

(14) pentru opera noastră



第 5 図

ラベル付表示は(15)で、(7)の適用を受けて(16)になる。

(15) [ # [ pentru ] [ # [ # opera …… ] ] ]  
 PP P P NP N

(16) [ # [ pentru ] [ # [ opera …… ] ] ]  
 PP P P NP N

(13)と(16)は#に関して全く同じ環境にあることになるが、(16)は縮約がおこらない。そうすると、(11)を緩める解決法は役に立たないことは明らかで、後者の方法を取らざるを得ない。しかし、取らざるを得ないと言っても、この方法は Selkirk (1972) にも示めされているように、かなり一般性の高いものである。そこで再調整規則として次のルールをたてる。

(17)  $\text{Prep} ] [ \# [ \text{Det} ] \Rightarrow \text{Prep} ] [ [ \text{Det} ]$   
NP NP

そうすると(13)は(18)のようになり、(11)の原則通り処理できることになる。

(18)  $[ \# [ \text{dintru} ] [ [ [ o ] [ țara \dots ]$   
PP P P NP D D N

### 1-3 関係代名詞

関係代名詞との組み合わせは人称代名詞である。いつものように例を示めせば次の如くである。

(19) *mei colegi de ignoranță care-și explică ……*

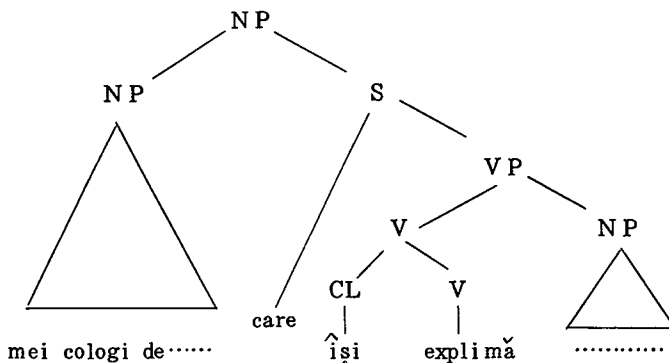


図 6

(20)  $\dots ] [ \text{care} ] [ \# [ \# [ \hat{i}\text{și} ] [ \# \dots ]$   
VP V CL CL V

(21)  $\dots ] [ \text{care} ] [ \# [ [ \hat{i}\text{și} ] [ \# \text{explică} \dots ]$  (6)  
VP V CL CL V

最終的ラベル付表示は(21)であるが、これは前節の(13)と同じ環境である。そこで(17)と類似のルールを設定すれば問題はないように見える。ところが(19)の過去形(20)を考えてみよう。

(22) *mei colegi de ignoranță care și-au explicat ……*

(22)では care-și とならずに care și-au となっている。この  $\hat{i}\text{și}$  と au は 1-1 節で見た組み合わせであり、# は介在しない。直観的に考えても、care と  $\hat{i}\text{și}$  より  $\hat{i}\text{și}$  と au の結びつきの方が統語上密接である。ところが(17)のような規則で care と  $\hat{i}\text{și}$  の間の#を削除してしまうとこの関係が明示的に表わせなくなってしまう。そこで(11)を改訂して(11)'のようにしよう。

(11)' 縮約は問題になっている二つの母音間に#が一つ以下介在する時に起こる。

これは(11)を緩めたもので当然前節で見た問題が再然してくる。即ち、(11)を緩めるのなら(17)は

不要になるのではないかと、という疑問である。しかし、(13)と(16)を考えると(17)は必要であり、しかも一般性の高い規則であることを考えるとすて去るわけにもいかない。そこで、もう少し前置詞を詳しく見ると、縮約をおこすのは intru, dintru, printru の三つのみで問題になるのは〔u〕のみである。しかもあとで見るように〔u〕が脱落するのは#が介在しない環境のみであるので(11)と(17)を両立させても問題はなく、むしろその方が好ましいとさえ言える。言い換えると、(17)を認めた方が音韻部門での取扱いがやさしくなるのである。結局問題は無いことになる。

#### 1-4 疑問詞

疑問詞の場合も関係代名詞とよく似ている。

(23) de ce-mi tulburi apa

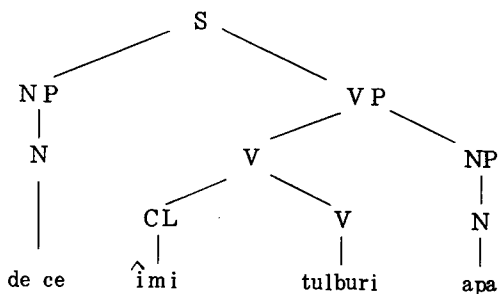


図 7

(24) de ce # } # } [ # [ # [ îmi ] [ # tulburi .....  
N NP VP V CL CL V

(25) de ce } # } [ # [ [ îmi ] [ # tulburi .....  
N NP VP V CL CL V

(24)が(7)の適用を受けて(25)になるわけだが、何らかの#の削除ルールが必要である。前節と同様、(23)を過去におくと

(26) de ce mi-ai tulburat apa

となってîmiは助動詞と縮約するので、#を1つ残しておかねばならない。そこで(27)のような再調整規則を設定する。

(27) QM# } [ # [ CL ] ⇒ QM } [ # [ CL ]  
NP VP NP VP

そうすると(25)は(28)のようになって

(28) de ce } } [ # [ [ îmi ] [ # tulburi .....  
N NP VP V CL CL V

(11)'の原則に合致する。

#### 1-5 接続詞

接続詞と人称代名詞との組み合わせは、今までの考え方で全てうまく処理できる。例は以下の如くである。



(36) nu - i fu prea greu să ………

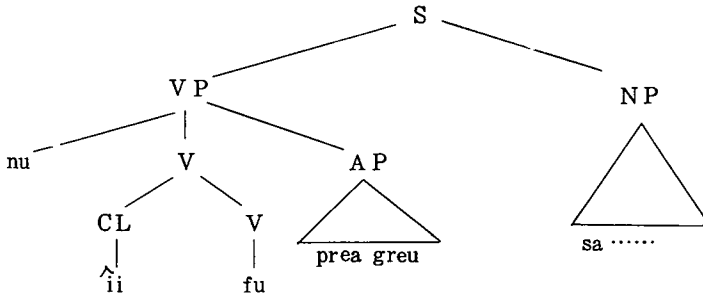


図 10

(37) { #<sub>s</sub> { #<sub>VP</sub> { nu } } { #<sub>v</sub> { #<sub>CL</sub> { i } } } { #<sub>v</sub> fu ………

nu と次の人称代名詞との間に # が一つ介在することは (38) の例からも妥当性がある。

(38) nu l-am făcut

即ち、nu と  $\hat{i}l$  よりも、 $\hat{i}l$  と am の結びつきの方が統語上密接であることが介在する # の数によって明示的に示めすことができるのである。

1-7 不定法の a

(39) a - și urma drumul

この a は辞書に出てくる不定法の形を示めすものであり、問題はない。即ち、a と și の間には # は一つも介在しないと考えられるのである。

1-8 その他

(40) avea ……… și -un cufăr

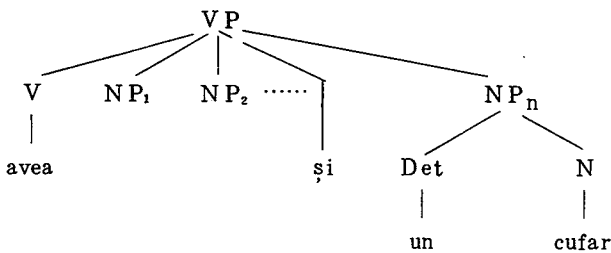


図 11

(41) ……… { și } { #<sub>NP</sub> { #<sub>Det</sub> { un } } } { #<sub>Det</sub> { #<sub>N</sub> { cufăr } } } { #<sub>VP</sub> }

(41) からわかるように、これも問題はない。(7)





(ii) 母音連続に於いて〔-voc〕になるのは〔high〕の数字が小さい方(ie, sonorityの小さい方)である。

(iii) 〔+cent〕の母音は入力にならない。

以上のことをルール化すると以下のようになる。

$$(46) \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} \alpha \text{ high} \\ -\text{back} \\ -\text{cent} \\ \text{v} \end{array} \right] \rightarrow \left[ -\text{voc} \right] / \text{---} (\#) \left[ \begin{array}{c} \beta \text{ high} \\ -\text{cent} \\ \text{v} \end{array} \right] \\ \text{条件 } \alpha \leq \beta \end{array}$$

$$(47) \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} \alpha \text{ high} \\ -\text{back} \\ -\text{cent} \\ \text{v} \end{array} \right] \rightarrow \left[ -\text{voc} \right] / \left[ \begin{array}{c} \beta \text{ high} \\ -\text{cent} \\ \text{v} \end{array} \right] (\#) \text{---} \\ \text{条件 } \alpha \leq \beta \end{array}$$

一見してわかるように、(46)、(47)は鏡像構造(mirror image)を成しているので、\*をその convention とすると、

$$(48) \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} \alpha \text{ high} \\ -\text{back} \\ -\text{cent} \\ \text{v} \end{array} \right] \rightarrow \left[ -\text{voc} \right] / * \left[ \begin{array}{c} \beta \text{ high} \\ -\text{cent} \\ \text{v} \end{array} \right] (\#) \text{---} \end{array}$$

と、一つにまとめることができる。

## 2-2 母音削除

- (49) a. <sup>^</sup>intr-o dimineața  
 b. eu n-am vorbit nimic  
 c. <sup>^</sup>intr-o zi m-am dus la tipografie……  
 d. veți avea timp să-l cercetați amanunțit  
 e. <sup>^</sup>imi place sau nu-mi place  
 f. n-au văzut cartea  
 g. las-o pe Ana s-o facă  
 h. să te-nduri ea  
 i. luați-l !

前節と同じく母音連続と削除される母音を示めすと

- (50) a. u + o → o      u  
 b. u + a → a      u  
 c. ă + a → a      ă  
 d. ă + <sup>^</sup>i → ă      <sup>^</sup>i  
 e. u + <sup>^</sup>i → u      <sup>^</sup>i  
 f. u + au → au      u

- g.  $\check{a} + o \rightarrow o$        $\check{a}$   
 h.  $e + \hat{i} \rightarrow e$        $\hat{i}$   
 i.  $i + \hat{i} \rightarrow i$        $\hat{i}$

(44) の素性分析を用いると次のことが言える。

(51) (i)  $v + \hat{i}$  の  $\hat{i}$  は常に削除される。

(ii)  $\left\{ \begin{smallmatrix} a \\ u \end{smallmatrix} \right\} + v$  の  $v$  が [ +back ] の時,  $\check{a}$  と  $u$  は削除される。<sup>(9)</sup>

以上のことをルール化すると

$$(52) \left[ \begin{array}{c} 1 \text{ high} \\ + \text{cent} \\ v \end{array} \right] \rightarrow \emptyset / v(\#) \text{ ---}$$

$$(53) \left\{ \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} 2 \text{ high} \\ + \text{cent} \\ v \end{array} \right] \\ \left[ \begin{array}{c} 1 \text{ high} \\ + \text{back} \\ v \end{array} \right] \end{array} \right\} \rightarrow \emptyset / \text{ --- } (\#) \left[ \begin{array}{c} + \text{back} \\ v \end{array} \right]$$

### 2-3 環境について

以上見てきたように, 環境(特に境界素性#)について次のことが言える。

(54) (i) # が介在しない組み合わせと, 一つ介在する組み合わせが同時に存在する場合, ルールの適用に関して前者が優先される。

(ii) # が介在しない組み合わせのみの場合は二(≡)重母音化か削除のどちらかがおこる。

(iii) # が一つ介在する組み合わせのみの場合は縮約がおこるものとおこらないものがある。

再び(22)を例にとって, その入力構造を見ると,

(22) …… care și -au explimat ……

(55) …… care #  $\hat{i}$ și au # explimat ……

となる。ところが一般的に  $A \rightarrow B / C(D) \text{ ---}$  のような( )で折りたたまれた規則は最大限に展開された形から適用されるきまりなので(即ち,  $A \rightarrow B / CD \text{ ---}$ ,  $A \rightarrow B / C \text{ ---}$  の順番), (48), (52), (53)のルールを<sup>(10)</sup>適用する時は#を含む式型に優先権があることになる。しかしそうすると

(56)\* care -și au explimat ……

となって正しい形が出てこない。そこで, これらのルールを循環規則(cyclic rules)と見なすことにしよう。今, #が入っている規則をA, 入っていないものをBとすると, (22)の派生は次のようになる。

入力	care [ # [ [ iși ] [ au# ] [ # explimat ] ] ……
第一サイクル	iși au
A	……
B	și - au <sup>(1)</sup>
第二サイクル	și - au # # explimat
A	……
B	……
第三サイクル	care # și - au explimat ……
A	……
B	……
出力	care și - au explimat

それに対して (19) は

入力	care [ # [ [ <sup>^</sup> iși ] [ # explima # ] [ # NP # ] ]
第一サイクル	<sup>^</sup> iși # explima
A, B	……
第二サイクル	<sup>^</sup> iși # explima # # NP
A, B	……
第三サイクル	care # iși # explima # # NP
A	care - și # explima # # NP
B	……
出力	care - și explima ……

(ii) の場合は全然問題はないが, (iii) の場合は厄介である。

- (57) a. mi - aș permite să afirm că eram prieten cu el  
 b. de unde  
 c. mă uitam la Eminescu

これらは皆, # が一つしか介在していないにも拘らず縮約がおこらない。しかし, もっとよく見ると, 上例の母音組み合わせ四つのうち, (48), (52), (53) の入力連鎖に現れるのは  $\check{s}\check{a}$  + afirm のみで, 他はルールの適用から自然に排除されてしまう。

- (58) a. mă <sup>^</sup>îmbrac  
 a' m - mbrac  
 b. se <sup>^</sup>îmbrace  
 b' se - mbraca  
 c. vă <sup>^</sup>întrebate  
 c' vă - ntrebati

(58) の例では, a, b, c が普通の文体, a', b', c' が口語体で, (57) C と同じ構造をもっている。文体によって縮約の程度に差があるのはフランス語の liaison とよく似ており, (58) の a', b', c' がそうであるし, Miorita という詩にも次のような縮約が見られる。

- (59) a. de trei zile - ncoace  
 b. da - ți oile - ncoace

この二つの例もやはり i が落ちてゐる。しかも、これらは # が二つ介在していると考えられる。従つて (52) に、文体に応じて適用域が変わるような何らかの convention をつけ加えればよいことになる。そして (57) C のような人称代名詞 + 動詞の組み合わせで動詞が i で始まらないもの、そして第一節で見た組み合わせ以外の # を一つもつ組み合わせには、 $x \rightarrow [-rule(n)]$  式の規則素性を与えることにすれば一応の解決はつく。その際、次の例でもわかるように

- (60) a. ce este acesta  
 b. ce - i acesta

単音節語の場合は除かねばならない。

それから、環境の問題とは直接関係はないが、一種の例外が存在する。

- (61) a. dacă s - ar putea  
 b. arçul și avîntul compozitorului s - au ținut de cuvînt .....  
 c. profesorul s - a risipit în sumedenii de laude

これらは全て se と助動詞との組み合わせであるが、(48) によつて各々 se - ar (〔sear〕), se - au (〔seau〕), se - a (〔seă〕) となる筈なのに<sup>(12)</sup>、〔e〕が削除されている。そこで区別素性 (diacritic feature) 〔+D〕を設定し、se だけを特別に扱うことにしよう。

$$(62) e \rightarrow \emptyset / \left[ \overline{+D} \right] a$$

ne や le は〔+D〕を持たないので規則どおりいくわけである。

### 3. 特殊な削除について

人称代名詞  $\hat{i}$ ,  $\hat{\imath}$ ,  $i$  mi,  $\hat{i}\hat{\imath}$ ,  $\hat{i}\hat{\imath}$  は母音連続という環境になくても削除される。

- (63) a. viața i - a fost binevoitoare  
 b.  $\hat{i}\hat{\imath}$  sînt recunoscători că mi - ai deschis aceste drumuri  
 c. l - am gasit într - o dimineața zgdui  
 d. umbra și - a luat vioara și pelerina  
 e. și lui i - i greu de oamenii urîți

組み合わせの殆んどは助動詞で、たまに a fi の活動形 i が見られる。(63) a を例にとれば、その構造は下図のようになる。

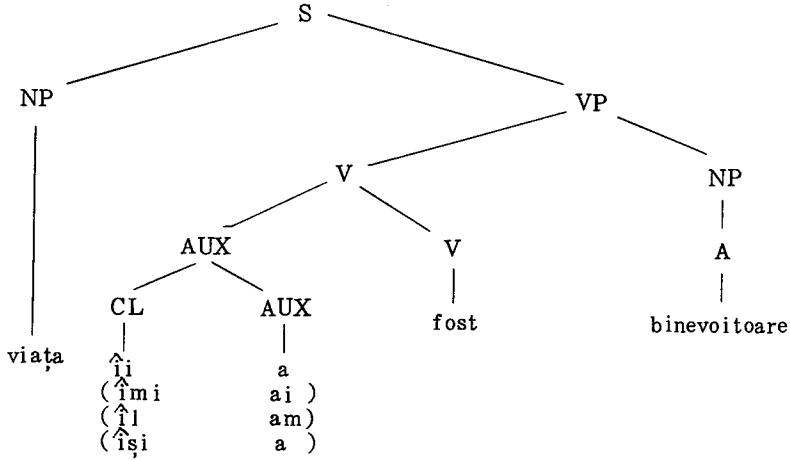


図 12

これらの諸例に共通して言えることは、全てAUX節点に支配されているということ、人称代名詞と助動詞との間には#は一つも介在しないこと、である。そこで次のルールを設定する。

$$(64) i \rightarrow \emptyset / \left[ \begin{array}{c} \text{AUX} \\ \text{---} \\ \text{AUX} \end{array} \left[ \begin{array}{c} +\text{seg} \\ \text{---} \\ \text{AUX} \end{array} \right]_i \left[ \begin{array}{c} a \\ \text{---} \\ \text{AUX} \end{array} \left[ \begin{array}{c} +\text{seg} \\ \text{---} \\ \text{AUX} \end{array} \right]_o \right] \right]_{\text{AUX}} \text{AUX}$$

(63) eについては、

$$(65) i \rightarrow \emptyset / \left[ \begin{array}{c} \text{V} \\ \text{---} \\ \text{V} \end{array} \left[ \begin{array}{c} +\text{seg} \\ \text{---} \\ \text{V} \end{array} \right]_o \# i \# \right]_{\text{V}}$$

(64), (65) はかなり ad hoc な感じがするが、今のところ他の解決方法がないので仕方がない。

(注)

- (1) 共時的観点、通時的観点については、de Saussure がその区別を主張して以来、多くの意見が出されてきた。それらについて述べる余裕はないが、筆者は通時的スコープを持たない共時的研究は無意味だと考える者の一人である。その点基底構造の変化、ルールの消失、添加、順序変更等を考える生成文法の考え方は秀れていると言えよう。これは本稿で生成文法のわく組を用いた理由の一つでもある。
- (2) 例えばフランス語 *Je t'aime*、の ' (アポストロフ) と同じようなものである。
- (3) 更に、縮約するものとして接続詞の *și* (h) 縮約させるものとして前置詞の *o*, *un* (b, h) を挙げることができるが、以下に見るように、この区分は重要なものではない。
- (4) 本稿は Selkirk (1972, 1974), 特に前者に強い影響を受けたものであるが、基本的な考え方そのものは Schane (1968), その他にも多く見られるものであって、いわば変形文法の考え方の特徴ともいえるべきものである。しかし、これを精密かつシステムティックに取り扱ったのは彼女の功績であろう。
- (5) もちろん *vă* とか *ar* などは弁別素性の行列で表示されるわけであるが、ここでは理解しやすくするために、わざと行列表示を用いない。

- (6) 関係代名詞は代名詞, 助動詞, 接続詞, 冠詞と共に閉じたクラスを形成する文法辞 (grammatical item) であり, 固有の境界素性を持たないと考えられる。
- (7) この他,  $\text{și -a doua zi, de -a doua zi}$  なども同様に考えることができる。
- (8) もちろん, 素性の選択の仕方によって色々な分析が可能である。(Golopentia - Eretescu (1964), Vasiliu (1966) 参照) ここでは sonority の段階をルールの上で表わす必要があるので [high] という素性を段階的に用いることにしたのである。なお, [high] を段階的に用いることは, 京都大学大学院の角道正佳氏の指摘によるものであり, 同氏に感謝すると共に, ここに明記しておく。
- (9) この  $v$  が [-back] ならば (48) の適用を受ける。
- (10) これら三つのルールに関しては, 相互に排他的なので, 順序を考える必要はない。問題になっているのは各々のルールに含まれている二つの sub ルールである。
- (11) 実は,  $\hat{i}si + au$  の  $\hat{i}$  が削除されるプロセスはまだ考慮していない。第3節でこの現象を考える。
- (12) 例 (42) b, g 参照のこと。

#### 参 考 書 目

- Chomsky-Halle (1968) The Sound Pattern of English.
- Golopentia-Eretescu, S (1964) Vowel Alternations in Transformational Grammar, Phonologie (Josef Hamm ed.)
- Selkirk, E (1972) The Phrase Phonology of English and French, unpublished doctoral dissertation M.I.T.
- \_\_\_\_\_ (1974) French Liaison and the  $\bar{X}$  notation, Linguistic Inquiry Vol.5 Nr.4
- Schane, S (1968) French Phonology and Morphology, M.I.T. Press
- Vasiliu, E (1966) Towards a Generative Phonology of Daco-Rumanian Dialects, Journal of Linguistics Vol.2, Nr.1